●証言による『南京戦史』(8)

46期　畝本　正巳

昭和12年12月15日，宿舎，南京中央飯店に到着した第16師団司令部将兵
<16師団経理部・金丸吉生氏撮影>

五、中山門入城と城内掃蕩

1　作戦経過の概要

第十六師団の左翼隊（9i・20i）は12月12日、歩兵第九聯隊が中山陵を占領し、第二十聯隊は13日早朝、南京街道方面より中山門を占領した。そして中山門からは歩兵第二十聯隊の二ケ大隊と第三十五聯隊（9D）が相次いで入城したが、歩兵第二十聯隊は中山東路以北、中山北路以東の地区を掃蕩した（歩兵第三十五聯隊が、中山東路以南の9D南部掃蕩地区を担任したことは、さきに述べたとおりである）。

歩兵第二十聯隊の二ケ大隊は、担任地区を掃蕩しつつ、その第一線をもって中山北路の線に進出し、歩哨を配置して入城第一夜を迎えた。翌14日も引き続き掃蕩したが、住民は逃亡してその姿を見ず、ほとんど銃火を交えることなく平穏裡に終了した。

歩兵第九聯隊は、師団命令により城内には進入せず、紫金山一帯の敗残兵の掃蕩に任じ、15日に入城して国民政府跡付近に宿営した。また、師団司令部も15日入城して南京飯店、国民政府、総理府跡に司令部を置いて城内外の警備を指揮した（写真）。

その後、12月23日まで城内に駐留したが、12月23日の方面軍命令による配置替えにより、第十六師団は城内進入部隊（9Dその他）と交替して、翌年1月20日頃まで城内外の警備を全面的に担任した。

▼師団参謀長中沢三夫氏は、入城後の状況について、次のように述べている。

【東京戦判における宣誓供述書】

「第十六師団は12月13日未明、中山門の城壁を占領し、後方の約二ケ大隊を城内に入れ、あらかじめ指示してあった地域―大平山上元門、下関及び中山路を以て画する地域を掃蕩させた。翌14日も引き続き掃蕩した。

12月15日、第十六師団は司令部及び小部隊を以て城内に入ったが、師団の担当区域には住民は逃亡していなかった。

12月23日、軍の配置替えあり。師団の一部は、さきに入城した部隊と交替して新配置につき、城内外の警備に任じて翌年1月20日前後まで南京に駐留した。この新配置後に、難民区は第十六師団の警備区域内に入った。難民区は入城当時から厳重に区別して警戒され、これが出入は特に許可されたものでない限り、将校といえども許されなかった。

入城後、下関に通ずる公路上に夥しい軍服、剣、弾入れ、軍帽などが捨てられていた。これらの軍装を捨てた兵は便衣となって潜伏していることは、当時の状態からみて明らかであった。城内掃蕩の際、城内に中国人が居なかったので、この便衣となった中国兵が難民区に潜入していると判断し、12月25日、日中両国人による委員会を編成し、住民を調査することになった。」（ゴシック筆者）

2　歩兵第二十聯隊将兵の証言

▼森　英生氏の証言（歩兵第二十聯隊第三中隊長、47期、明星大学勤務）

「13日朝、中山門の城壁上で遥拝式を終えた中隊は、その場で城内の掃蕩を命じられました。

私は中隊を率いて城内に降りましたが、降りたところは中山門から北寄りで、城壁を利用した弾薬庫がある所でした。城内には敵兵はもちろん住民一人居らず、中隊は市中を下関に通ずる道路に出ました（注・中山北路）。その道路を一歩越えれば難民区です。見ると、難民区に接する道路脇には、敵の軍服がところどころ山と積まれている。明らかに敵が難民区に逃げこんだ証拠です。けれども、難民区には一指も触れることができませんので、やむを得ず軽機を道路上、下関方向に向けて据えて、敗残兵が難民区に進入するのを阻絶しましたが、もう時機おくれでした。

この時、下関方向から一台のトラックが走ってきました。見れば紅卍字の旗を掲げ、軍服の敵兵を満載し、アッと驚く間に、人もなげに我々の戦線を突っ切り、通り抜けて行きました。このトラックの行動は、まことに目に余るものがありました。

このようなことはありましたが、弾丸一発も使わずに城内の掃蕩を終わったのですが、他地区でも同様であったと思いますが、城内は静穏そのもので、掃蕩の第一夜など殆ど無警戒でおりました。その夜、私は炭火の一酸化炭素中毒で危うく命を失うところを、衛生兵に助けられたりしましたので、よく覚えております。

＊

私たちは、南京占領から翌年1月末北支に転進するまで四十数日間、城内の北四半部に駐留し、朝香宮軍司令官邸（長江飯店といった思います。軍司令部は首都飯店でした）周辺を警備しました。私たちの宿舎は、中央ロータリーから下関に進んだ道路の右手にあり、さらに進むと右手に松井軍司令官邸がありました。

住民は一人も帰ってこず、難民区は立入禁止で接触がなく、便衣隊狩りなど、任務外のことで関知せず、追送糧秣で正月用品が届きましたので、至極のんびりした年末年始を過ごしました。

＊

第一線歩兵中隊長としての戦闘体験をもとにして、南京事件は虚構であるという私の考えを述べます。

(1) 目撃者がいない。

私は戦後、戦犯容疑で米軍の取り調べをうけましたが、これは日本人同士の密告によるものでありました。この自分の体験からしても、東京裁判以来、いろいろ議論はあっても、多数従軍した日本人記者その他の中から目撃者や密告者が現われ、かの犠牲者40万人に及ぶという虐殺の、しかとした証言がなされたということを聞かない。

(2) 当時、南京でそのような噂を全然聞かなかった。

大虐殺といえば、一中隊長や大隊長などが、恣意で実行できるものではない。必ず計画者、発令者、命令の伝達者、実行者があるはず。たとえ、極秘裡にやったとしても、必ず洩れて噂となったはずですが、そのような組織的、計画的な残虐行為が行われたという噂は、四十余日にわたる南京駐留間、その後一年間の中隊長在任中も、一度も聞いておりません。

(3) 敵側の巧妙な虚構の宣伝。

狭い城内の四分の一を区切った難民区に充満する住民を抱え、降伏勧告を無視し、首都防衛を広言すること自体、非常識です。それによって生ずる不測の事態は、すべて中国側の責任であったにもかかわらず、これを逆用して虐殺という宣伝を展開したと考えます。

城外の激戦、城内の市民や第三国人に与えた恐怖は、測り知れないものがあったでしょう。凄惨な戦場の光景を眺めた第三国人は、敗者に同情し勝者を憎んだかとも思いますが、このような感情に訴えた中国側の宣伝が、いかに効果があったかは想像に難くありません。

戦場で当然発生した戦死者までも、日本軍による残虐行為として、世界に訴えだのでしょう。

(4) 第三国の対日悪感情

敵正中立であるべき第三国も、われわれの軍事行動を極力妨害し、援蒋行動をつづけました。私が体験した紅卍字のトラックの暴走も然りです。私は今なお、吊革に立つ満員の敵兵の顔が忘れられません。

このような先入感を持つ第三国人がさきほども申しましたように凄惨な新戦場を眺めたとき、「諸悪ことごとく日本軍にあり」としたことは、必然の成行きでしょう。

(5) 逃亡または釈放俘虜の虚構の証言

残念ながら、私は日本軍の一部に不法行為がなかったと断言することはできません。俘虜の大部は釈放されたという噂を聞きましたが、その多くは、逃亡ではなかったと思います。私が俘虜護送のとき垣間見た収容施設の不備、多数の俘虜に対する管理の不馴れなどから、逃亡が多発し、日本軍による懲罰的行為が加えられたことも大いに考えられます。

これらの俘虜が敵側に無事帰った場合、自己の行為を正当化し、すべてを残虐的行為として針小棒大に報告したものとも推察されます。これらが「南京大虐殺」という虚像に拡幅したのではないでしょうか。

南京攻防戦においては、戦闘の特質上多数の投降者を得ましたが、たしかにわれわれの倫理観から、俘虜を蔑視した傾向がありました。我が軍一部の分子の不法行為によって、禍害を蒙った中国人民に対しては、深く陳謝しなければなりません。

しかしながら、一方的な資料のみによって「大虐殺」と断定され、われらが子孫に歴史として伝えられることは、なんとしても忍び得ないところであります。

＊

▼栗原直行氏の証言　（歩兵第二十聯隊速射砲中隊長代理、49期、浜松市幸三―二十二―六）

「私は速射砲中隊の小隊長として従軍しましたが、南京戦前に中隊長が負傷入院したため、中隊長代理として参戦しました。南京城内には12月13日より12月23日まで滞在し、23日、城外の湯水鎮に移動して警備に任じましたが、記憶をたどって入城前後の状況を述べます。

12月13日未明、聯隊の第一線が中山門を占領しましたので、私の中隊は天明頃、中山門東側地区に進出し、本道両側地区に陣地を占領し、敵の逆襲に備えましたが、反撃はありませんでした。

孝陵衛付近では激戦が展開されたので、中山門に通ずる本道側には、若干の遺棄死体をみましたが、多数であったような記憶はありません。13日天明頃、中山門東側に集結した際、聯隊本部が若干の捕虜を捕えましたが、上級司令部に送ったと思います。

聯隊は中山門東側に集結した後、14時頃より城内に進入を開始し、私の中隊は第二大隊に協力を命じられました。所命の掃蕩区域には、住民の人影も遺棄死体もなく、まして交戦することもなく、平穏裡に掃蕩行動が終了しました。

割り当てられた中隊の宿営地には、夕方のまだ明るいうちに入ったのですが、国民政府の要人、林森の邸宅付近で、屋内はかなり荒らされていましたが、住民は居りませんでした。

入城後、日にちは、はっきりしませんが、大隊に配属されて玄武湖付近の掃蕩に参加しました。太平門を出て城壁の外側に沿って前進し、玄武湖周辺を行動したのですが、交戦することなく、示威行動に終わったことを記憶しております。この付近では死体を見ませんでした。

入城後何日経過していたか、聯隊が城外に移動する数日前ではなかったかと思いますが、見学のため挹江門を出て下関付近に行きました。当時、下関には多量の遺棄死体を残置しているとの噂が流れていましたが、私が行った時は、戦場掃除後であったのか、屍体は見かけませんでした。

＊

▼伊庭益夫氏の証言　（歩兵第二十聯隊第十中隊小隊長、現住所、京都府舞鶴市字本四五）

中山門は12月13日朝、他中隊が占領し、わが中隊は軍旗護衛中隊として中山門から入城した。中山門は三つあり、北側の崩れた門をよじのぼり、中山門上で軍旗を捧じて「世紀の万歳」を行った。

中隊は入城後、直ちに市内掃蕩に移って国民政府跡に突入したが、敵兵を見ず、中山北路の線に警戒網を張り、陣中動務の態勢をとって約十日間の警備を終わり、他部隊と交替して湯水鎮に後退した。

＊

なお、伊庭氏は筆者の質問に対して、次のように答えた。

○ 入城当初より、外国租界や難民区への立入禁止の命令は、厳重にこれを履行しました。

○ 城内では火戦を交えず、婦女子、市民および便衣の敗残兵の殺害など、認めておりません。

○ 戦車による血の海とか、キャタピラで踏みつぶす、死体累々の惨状など全くありませんでした。

○ 中山門の城壁上で捕虜を一列にならべて殺害して落としたというような光景については見聞しておりません。

＊

▼森王　琢氏の証言　（歩兵第二十聯隊第三大隊長代理、43期、山口県下関市貴船町四―一〇―五三）

「私は12月15日まで中山門城外に在って、16日第十六師団長、中島中将が中山門より入城される時、城門内で第二大隊が軍旗を捧じて整列して迎え、私の第三大隊は師団長に従って入城した。

そして、翌年1月23日（あるいは24日か正

確でない）まで、城内に駐留して警備に任じ、一度ぐらい城外の掃蕩に出た記憶があるが、戦闘はなかった。

約一ヶ月余りの警備間、街に死体が散乱している様子など見たことがない。もちろん、機関銃で集団射殺したという、そんな銃声も聞かず、うわさも聞いたことがない。

ただ、下関に行ったとき、揚子江岸に多数の溺死体が漂着しているのを見た。これは、最後まで残された中国兵が、南京陥落前に挹江門からなだれを打って逃れ、江上で舟が撃沈されたものであろう。」

＊

▼池田早苗氏の述懐　（歩兵第二十聯隊中隊長、41期、大阪市大正区三軒家東六―一四―一〇）

「中国軍は退却にあたり一般住民と混交し、しかも便衣に変装しているので識別が困難でした。南京陥落後、何日後か覚えていませんが、揚子江岸の下関に行ったことがあります。死屍累々で、実数は五、六千ぐらいではなかったでしょうか。地上に伏した死体は、多数に見えるものですが。」

3　歩兵第九聯隊将兵の証言

▼六車政次郎氏の証言　（歩兵第九聯隊第一大隊副官、49期、大阪府堺市新金岡町四丁目三―九―三〇六）

【筆者注】　歩兵第九聯隊の入城前後の行動については、当時の第三中隊長赤尾純蔵氏42期（京都市東山区山科日ノ岡石塚町二五―四）、聯隊旗手、中村竜平氏49期（東京都田無市南町四―一九―一〇）、大隊本部書記、佐藤増次氏（滋賀県長浜市神前町八―八）、第三中隊分隊長（のち少尉）増田寅一氏（京都市伏見区深草芳本町六七一）、第二中隊小隊長、野村美代太郎氏、第三中隊指揮班軍曹、長谷川茂雄氏などからも貴重な資料をいただいた。

六車氏の証言を中心に、聯隊の行動をうかがうこととする。

「13日早朝、歩兵第二十聯隊が中山門を占領して入城したが、わが聯隊は師団命令により城内に進入せず、掃蕩隊となって紫金山一帯を掃蕩することとなった。

南京一番乗りをめざし、南京入城を夢にまでみて戦った私たち将兵は、南京城壁占領の瞬間、城内進入を禁止されたのである。この軍の統制は、まことに厳しく、見事なものであった。

内地では「南京占領を祝う提灯行列」で国民が浮かれ気分の頃、紫金山の激戦で多数の戦友を失ったわれわれは、12月の寒空のもと寝るに家なく、枯れ木をひろって焚火をし、乾パンをボソボソとかじりながら、今は亡き戦友を偲びつつ、わびしい戦勝気分を味わっていた。左腕を吊るしたままの姿で病院を飛び出した私は、傷の手当もできず、寒くて夜もほとんど眠れずに、二晩をすごした。

12日14日、大隊は城外に居ったが、中山門から城内数百メートルのところに、師団の第二野戦病院が開設されたので、大隊附軍医の指示により入院した。大通りの北側の四階建てぐらいの建物で、中国の病院の跡とかいい、ガランとしていた。衛生兵が中国人の雑役夫を使って、部屋の跡片づけ、掃除、寝台の配置などでゴッタ返していた。

付近の市街は、ひっそりとして銃声や騒音を聞かず、火災もなかった。病院では人手が足らず、多数の中国人が雑役として働いていた記憶がある。

入院後二、三日間は、食事は一椀の飯と、粉味噌をとかした味噌汁一杯。汁の中には乾燥野菜が少々浮かんでいる程度であった。数日たって、味噌汁に「水牛の肉」とかいうのが一切れ入っていたが、半張革をシャブッているようであった。

私は14日より十日間入院治療をうけて、24日に退院して原隊に帰ったが、城内は極めて平穏で、特に変わったことは見聞しなかった。

大隊は15日頃、城内の宿舎を割り当てられ、17日頃城内に移駐したよしであるが、私が原隊復帰後に、城外掃蕩に任じていた小隊長から、次のような話を聞いた。

「一ヶ小隊で中山門東方紫金山中の警備を担当したが、激戦により小隊は約三十名に減少していた。夜半、東方の山中から敗残兵数百名が、日本軍が居るのに気付かず、南京に向かって来たのを捕えた。

しかし、我々の人数が少なく、もし小人数と判れば危ないので、銃を取りあげ凹地に集結させ、外側の兵のみを電線で縛って逃げないようにした。

ところが、日本軍が小人数とあなどったのか、手榴弾を投げつけてきて暴れだし、収拾がつかなくなったので、軽機・小銃で弾丸のある限り射った。小隊長も、手向かってくる敵を斬りまくり刀が折れた」

＊

▼佐藤増次氏の述懐　（第一大隊本部先任書記）

私は入城後の19日頃、戦闘詳報作成の資料を得るため、一ヶ分隊の護衛を連れて城外の戦跡を見て廻った。

中山陵、紫金山中腹、玄武湖南側を至って城内に帰ったが、私の踏査経路では虐殺の跡らしいものなど見受けなかった。ただ城内に通ずる道路付近に（太平門か玄武門であろう）地雷の爆発により、人馬の死体が散乱しているのを見た。

市街では住民を見なかったが、大隊本部の宿舎付近の民家の奥には、各家に一～二名の住民が残っており、残した家財を見張っていたようである。本部の兵が食糧徴発に行って「奥の方に人が居た」と言っていた。

二、三日後、聯隊本部の会報に出席したが、本部内では住民も、ボツボツと家に帰り、卵を部隊に売りにきた者もあった。

家具や寝具などを徴発したことはあるが、住民に危害を加えたりしたことはない。」

＊

▼野村美代太郎氏の述懐　（第二中隊第一小隊長、のち大隊副官）

「私は、12月10日、紫金山の桂林石房の夜間戦闘で、右足頸部を負傷し、麒麟門付近の隊編帯所で治療をうけ、南京城内の原隊に追及しました。したがって、入城直後の状況については、知りません。ただし、原隊に追及中、南京城内の基礎工事途中の建築現場で、五、六名の中国兵の死体を見たのみです。

その後、新塘市の兵営に移動するまで、数万に及ぶ虐殺など、その痕跡等も見たことはありません。」

＊

▼長谷川茂雄氏の証言　（第三中隊指揮班、軍曹）

【筆者注】　長谷川氏は、現在老衰甚だしく記憶は正確ではないが、と前置きして、第三中隊の行動を詳しく述べている。これを読むと、現役軍曹時代〝身命を賭けた行動〟というものは、実によく覚えているものだと感心した。入城前後の部分のみを摘記する。

「私たちは紫金山山麓の戦闘が終わって、12月15日頃、市内が平穏になった頃に入城しました。市内は平静で、馬車が走り、住民も歩いていたように記憶しております。聯隊は約一週間城内に駐留したのみで、南京東方の温泉地に約一ヵ月駐留しました。

ただ南京郊外で大きな穴を掘り、傍らにかなり多数の死体があったのを見た記憶があります。戦場掃除であったと思います。」

＊

▼竹内五郎氏の証言　（歩兵第九聯隊歩兵砲隊衛生兵、藤沢市羽鳥三―一―七）

私は歩兵砲隊（隊長、服部大尉）に昭和12年1月入営し、衛生兵として中国戦線に参加しました。

南京戦では中山門から入城し、軍官学校に宿営して、12月の暮れ近くに湯水鎮の兵舎で正月を迎えました。

南京城内は外出禁止でしたが、私は衛生兵でしたので、患者をつれて大隊医務室や野戦病院に行きました。

戦死者の死体がゴロゴロという光景は目撃しておりませんし、火災もなかったと思いますが、国民政府の建物の左側に中国の消防署

があり、消防車もあって一度ボヤで出動して行くのを見たことがあります。不思議なことに、街頭には警察官が立っていなかったことです。

その後、大別山で負傷し南京兵站病院で全快して原隊復帰の時、南京兵站に泊まって外出したら、そのときには十字路に警察官が立っていました。

＊

▼六車政次郎氏は、いわゆる「虐殺」問題については、次のように述べている。

(1)、城外の戦闘は、追撃態勢から外郭陣地の攻撃に転移し、整斉たる陣地攻撃ではなかった。わが軍は各所で楔状に深く突入して、中国軍の陣地が崩れたのである。したがって、陣地に配備されていた中国軍の大部は、日本軍が深く後方に進出していることに気付いて、12月10日頃以降、下関の渡船場めざして敗退した。

この間、紫金山の山中、あるいは南京城東北方地区で、日本軍と衝突して各所で撃破されたが、これは首都の攻防という正規の戦闘行為である。

城門占領後は、戦闘区域、進入部隊を統制して、不慮の事故防止に努力が払われた。

(2)、入城後は早々と住民が復帰し、日本軍は彼等の一部を雇傭した。

(3)、南京占領後、12月24日頃までは、攻略部隊をもって城内警備にあてられたが、治安が回復次第、速やかに郊外の兵営に移した。

この間、上司より厳しい示達があり、文化財の保護にまで細心の注意をはらった。

(4)、上海から南京に向かう追撃戦では、北支では見られなかった地域住民ぐるみのゲリラ的抵抗にあい、いくたびか、危地におちいった事例があった。

したがって、個々の反撃行為はあったと思うが、南京のような大都市で、無抵抗の市住民を殺すなど、そのような話は当時、聞いたことがない。（ゴシック筆者）

＊

4　師団副官、参謀の証言

▼師団副官・宮本四郎氏34期の遺稿

――第十六師団司令部の入城――

13日早朝から各聯隊に警備地区を区分して入城し、師団長は將介石の邸宅に入り、司令部は、南京市街東寄りの「南京飯店」に入った。ところが、電気がつかず水道も出ない。蠟燭の光の下で薪を焚いて暖をとる。煙が濛々と廊下に満ち、食事はパラ米の飯と水牛のビフテキ。ビフテキというと美味そうだが、水牛は変な臭があるし、硬くて歯が立たない。この水牛は、追撃間荷物を乗せたり、歩兵砲を挽かせてきたのが、食卓にのぼってきたのである。

師団長宿舎には、手押しポンプの井戸が一つだけあった。四、五日した頃、兵が水が臭い臭いという。仕方がないので遠くから水を運ぶことにした。

師団長宿舎には、師団長と私と衛兵一ヶ分隊が居住したが、一国の宰相の公邸としては、まことに質素なものであった。

ホテルと師団長宿舎とは一キロ以上離れていて、炊事ができないのでホテルに食事に通っていた。

その後、司令部は中華民国政府の総理府の建物に移った。これは洋館と中国風建物とを継ぎ合わせたような建物で、廊下や庭でつないでいた。参謀部、各部とも戦後処理で多忙をきわめた。

――中　略――

南京城内はわが師団が警備することになり、南京陥落後は内地からいろいろの人がやってきた。

なかには、海軍関係の剣道の教士が、陸軍将官の紹介状を持ってきて、非常識にも捕虜を斬らしてくれなどと、師団長に直接申し込んで来たりした。もちろん、こんな輩は門前払いをくらわした。

城内に入ったとき、下関に向かうメインストリートで、紺に緑がかかったズボンが、舗道のコンクリートが見えないほど敷らばって、それが延々一キロ以上に及んでいた。変だなあと思ったが、これはまさしく中国兵のものであった。軍服を脱ぎ捨てて民間人に化けて逃げたのである。これこそ、歩兵第三十八聯隊の下関進出で、退路を断たれた中国兵の残したものであろう。

城内には婦女子は一人も居なかった。これはカトリック神父が、立派な煉瓦壁のある区域に収容して守っていた。これに倣って「難民区」というのがあり、ここには男ばかりが集まっていた。どうして食っているかと思うほど多勢いたが、間もなく、その中に中国兵が逃げ込んでいることが明らかになった。（入城式及び式後の祝宴の状景が記録されているが省略する）（ゴシック筆者）

＊

▼大西一氏の証言　（上海派遣軍参謀、36期）

「終戦後、日本軍南京占領時、残虐行為があったと盛んに宣伝されましたが、日本はこれに対抗する何らの手段を持たなかったため、それが真実のように誤解されました。そして、松井石根大将は東京裁判において、第六師団長谷中将は南京軍事法廷において、それぞれ死刑の判決をうけて処刑されました。

私はその時、別の事件で巣鴨に入っており、証人として出廷すると言いましたが、私は巣鴨に入所している身分であり、軍司令官の弁護をその参謀がするのは、余りにも近すぎるとして出廷できませんでした。両将軍が南京事件の責任を負わされ、処刑されたことは、誠に残念でなりません。

さて、南京で残虐行為があったか否かの問題でありますが、非戦闘員が混在した戦場ですから、絶対に誤りはなかったとは言えません。しかし、当時、英・米が宣伝したような残虐行為は、絶対になかったと断言します。」

――入城直後の状況――

「私は13日午後、第一線の状況視察のため南京郊外、湯水鎮の軍戦闘司令所を出発して、中山門を経て城内に入り挹江門に向かいました。挹江門の手前四、五百メートルのところに首都飯店（後に中支那派遣軍司令部を置いた建物）がありますが、中国軍がこの建物に拠って頑張っているので、第十六師団の一部がこれを攻撃していた。私は大隊長のところに行って状況を聞き、健闘を祈った後、街のあちらこちらを見廻ったが、住民は殆ど居らず、また何らの異状を認めず司令部に帰りました。

南京の守備兵は、11日夕から挹江門を経て揚子江岸に向かい続々退却を開始したようだが、13日午後になると、下流方面より山田支隊、上流より第六師団の一部が進出してきて、退却する敵を挟撃した。

私は当時、前述のとおり第十六師団の一部と会った後、司令部に帰ったので、挹江門内外の状況は知らなかった。18、19日頃（？）所用のため挹江門を通り下関に行ったとき、戦場掃除が行われていなかったため、挹江門―下関道とその両側および揚子江岸には、多くの死体がそのまま残っていた。

最近多くの人から何人くらいかと聞かれるが、これは見た人の主観で大いに違うので何人と言うことは難しい。強いて言うならば、三千人～五千人くらいというところだろう。この死体は、直ちに兵站部隊に指示して処理したが、城内に残留していた英米人が、この死体を見て「虐殺」と宣伝したらしい。

この中には、非戦闘員も含まれていたことと思うが、武器を持って退却する敵を攻撃することは、当然の軍事行動である。住民が混在しておれば被害は免れ得ない。なぜ中国軍は、整斉と組織を保ち、白旗を掲げて降伏しなかったのか。市内の住民は、適当なところに集まって、市役人の統制のもとに、非戦闘員たることを表示しておれば、被害を最小限に食い止められただろう。事実、金陵大学を中心とする難民区は、英米人の手により管理され、日本軍もこれを認めて無事だったのである。

当時の南京は、中国軍の指揮官、中国政府の役人は部下住民を見捨てていち早く逃亡していた。何故、市の役人・軍の指揮官らが、民衆を整理しておかなかったか、残念でなら

ない。」

——占領後の警備その他——

「占領直後の警備担任は、最初第九師団であったが、第九師団はなるべく早く上海付近に帰って戦場掃除がしたいと言い、第十六師団に替わったのである。

師団長は中島中将、中沢参謀長は温厚な人格者であったが、師団の細部の状況は情報主任の専田盛寿参謀30期、後方主任の木佐木久少佐33期両氏に聞いて欲しい。

＊

▼筆者は、専田参謀の消息を尋ねたが不明であった。木佐木参謀は現在八十余歳の高齢であるが、鹿児島市に住んでおられることが判った。早速連絡したところ、次のようなお便りをいただいた。

＊

「占領後二～三日間に非戦闘員一万二千人を殺害？　そんな事実は全くありません。松井大将、朝香宮軍司令官の厳命により、軍紀・風紀を厳しく取締まり、参謀連中まで市内を巡回して非違を戒めました。実は私も巡回中に中国人からの知らせにより、残念ながら強姦の現場を取り押え、原隊（野砲兵第二十二聯隊）に連行して聯隊副官に厳罰を要求したことがあります。

このような不法行為が若干あったことは否めませんが、一万二千人殺害など噂に聞いたこともありません。」

5　「中山門内惨劇説の考察」

大虐殺説によると、「13日か14日に中山門城壁上で捕虜（紅槍会匪）を惨殺した」（東京日日新聞特派員の鈴木二郎記者の目撃記）、汪良氏が中国帰還者連絡会の訪中団に語った話「13日、城内進入の日本軍によって中山路・中央路は血の海、戦車で蹂躙した」などがあるので、若干触れることとする。

——城壁上の捕虜惨殺説について——

この問題は、洞富雄氏と山本七平氏が・目撃した日時・果たして紅槍会匪であったかどうか・殺される捕虜の表情・声までどうやって確認したか・中山門一番乗り部隊判定などについて、N軍曹の証言（歩兵第三十五聯隊第二大隊本部附軍曹のち中尉、野村敏明氏）の信憑性にまで触れて論争している。その細部に立ち入ることは避けるが、「中山門一番乗り」部隊の判定の困難性については、森英生氏の証言（前出）で述べたとおりであり、論争の本筋からは外れた問題である。

洞氏は中国の農民解放闘争における紅槍会匪の歴史まで述べ、「南京攻防戦当時、南京防衛軍に編入されていたとしても、すこしも不思議ではない」という仮説を展開しているが、中国側の『抗日戦史』によると、南京防衛軍の編成には紅槍会は記録されていないようである。

また、城壁上の捕虜の表情、声の確認について「鈴木二郎記者が望遠鏡をもって見たとしても……」等々と述べているが、中山門から入城した参戦者の証言によると、このような事実は認められない。鈴木二郎記者ただ一人が目撃したのであろうか。

——血の道路、戦車蹂躙説について——

汪良氏、許伝音氏（紅卍字会副会長）、ベーツ博士（金陵大学教授）らの証言を綜合すると、

「13日～15日の間、城内の道路に満ちあふれた避難民、退却兵、負傷兵の群れを、見さかいもなく銃殺し、戦車がキャタピラで死体の上を踏みつぶしながら進み、中山路・中央路は血の道路となった。

市内を廻ってみると、南・北・東・西各方面の大通りでは約五百の屍体を見、入城後数日間に男女、子供を含む非戦闘員約一万二千人が殺されたと結論できる」と述べている。

ところが、参戦者たちの証言によると、「城内の道路周辺ではほとんど住民の姿を見なかった、脱ぎ捨てられた軍服の山はあったが……」という。比較的平穏裡に掃蕩を終了しているのである。

また、戦車中隊長城島越夫氏40期は、前述のとおり戦車による蹂躙説を言下に否定している。

このように城内掃蕩について、両者の証言は大きく喰い違うのである。

〈未完〉

会員の声

▼荻原誠氏の述懐　（元第百十四師団兵器部勤務、横浜市住住）

いわゆる「雨花台の虐殺」について

私は南京攻略戦に参加した一人である。抗州湾上陸から一ヶ月余り、ひたすら南京を目指して戦い進んだ。当時私たちは、柳川兵団の作戦命令に基づき、昭和12年12月12日には首都南京に突入するという意味から、一、二…一、二が合言葉であった。

12月10日秣陵関の堅陣を抜いた聯隊（千葉小太郎大佐指揮の歩兵第百二聯隊）は、南京城外最強の堡塁「雨花台」へ殺到したが、堡塁上から射ちおろされる砲撃によって、私たちは一歩も動くことができなかった。聯隊長は虎の子の軍旗護衛小隊の中から、小玉伍長以下8名の分隊を抽出し、雨花台上の堡塁に突撃を命じた。

標高四〇〇米の頂上を目指して、小玉分隊は日章旗をかざしながら一歩一歩肉迫して行った。（筆者注・雨花台は標高約五十米、誤認と思う）

野砲、歩兵砲の一斉掩護射撃は山肌を一変させてしまった。三十分後、頂上には日の丸があった。聯隊長は副官に命じて上級司令部へ報告させる。

「12月12日12時20分、歩兵第百二聯隊は雨花台を占領せり」と。

それから私達は、軍旗を先頭に雨花台を降り、一挙に中華門へ突進した。雨花台の堡塁を失った中国兵の大多数は城内へ退却したが、既に城門は閉ざされ、城壁下を右往左往し、窮鼠となって我軍に反撃してきた。至近距離からの射撃で城壁下や手前のクリークの中には、忽ち死体が累々と横たわり、辛じて岸に泳ぎついた者も全滅した。

こうした光景は戦場にあっては当然のことであって、喰うか喰われるかの戦いである。

数日後、聯隊は城内警備の任を解かれて反転、再び同じ道を通った。激戦のあった雨花台下では、数多の戦友の冥福を祈りながら湖州へと向かった。

巷間伝えられる「雨花台付近大虐殺」の現場など、どこにも見聞することはなかった。枯れた芝生には、僚友たちの尊い血潮が黒く色が変わって残っているのを見つけ、胸のうずく思いがした。流布されている雨花台の集団虐殺二万人というが如きは、全くの虚構である。

会員の声

▼仙鶴門鎮における集成騎兵隊の戦闘

（騎兵第三聯隊本部書記、少佐22期、加藤正吉氏、名古屋市千種区鹿子町四—一二）

【筆者注】『偕行』59年8月号に「仙鶴門鎮の戦闘と投降捕虜」（48期、沢田正久氏の証言）を掲載したところ、松野治郎氏（騎兵第三聯隊聯隊旗手、当時は負傷して後送される48期）の尽力により、『騎兵第三聯隊史』編纂委員主任の責任者、加藤正吉氏から「集成騎兵隊の戦闘」に関する記事をいただいた。この戦闘は、3Kが主役を演じているので、その梗概を摘記する。沢田氏の証言と併読されれば、戦闘状況を知ることができる。

——戦闘前の状況——

集成騎兵隊（3k、9k、17k、101k、軍直轄部隊として、9k長、森吾六大佐23期指揮）は、12月11日、9Dと114Dの間隙閉鎖のため、徒歩部隊となって進出を企図したが、同日夕刻、軍命令により、紫金山北方地区を迂回して下関付近に進出し、敵の退路を遮断するに決した。同日二四、〇〇頃16Dの右翼発化門付近に進出したが、敵陣地に阻まれ、反転して仙鶴門鎮付近に兵力を集結し、爾後の戦闘を準備した。

師走の冷気は残衣を通して露営の夢結びがたく、南京攻撃の砲声は終夜にわたり寒夜を揺るがした。明くれば12日、天候快晴、各部

隊は南京攻撃を前にして、人馬の補給を完整し、同夜は集成騎兵隊の前哨部隊として警戒配備についた。

——3K戦闘の概要——

12日二四、〇〇頃、前哨中隊たる第二中隊（中隊長43期木村正世大尉）正面に、銃声とともに爆発音が熾んとなり、伝令は「第二中隊正面に兵力不明の敵大部隊が本道上を怒濤の如く東進中、第二中隊は目下この敵と交戦中」と報じた。ここにおいて、星聯隊長（24期、星善太郎中佐）は直ちに非常呼集を命じ、各隊に次の命令を下達した。

(1)兵力不明の敵大部隊は、第二中隊正面本道上を東進しつつあり、第二中隊は目下この敵と交戦中。

(2)第一中隊は速やかに本道上、第二中隊と聯隊本部の中間地区に進出し、この敵を攻撃すべし。

(3)MG小隊は予の直轄となり本部北側に進出、第二中隊は現在地を確保すべし。

(4)予は現在地にあり。

聯隊長は第一中隊、MG小隊の進出を確認した後、副官川島大尉以下五名を前線に派遣した。戦場は一時小康状態になったが、再び激しい銃声がおこり、本部付近に負傷者が次々と搬送され、戦いの熾烈さを物語った。

敵の大縦隊は無統制のまま夜陰に乗じ、味方の屍を乗り越えて東進をつづけ、わが重砲陣地（独立攻城重砲兵第二大隊第一中隊）まで乱入した。この激戦は翌13日午前9時ごろまで続き、敵に与えた損害も大きかったが、わが部隊の犠牲も上陸以来の最大に達した。

——第二中隊の戦闘状況——

第二中隊は所定の前哨配備を完了し、二三、五〇頃、本道上の歩哨交代のため糟谷、毛受上等兵、中川一等兵が立哨地点到着直後、五、六十米前方に敵の大縦隊を発見し、直ちに警報射撃を行い中隊長に報告した。

中隊長は木村四郎ラッパ手に非常呼集を吹奏させ、部隊を本道交叉点付近に集結配置し、敵を至近距離に引き寄せて一斉射撃をおこない一時敵を撃退し、水野伍長以下三名の斥候を派遣して敵情を捜索した。次いで中隊長は、主力（第一小隊と第三小隊）を本道上に、第二小隊を歩哨の位置に、第四小隊は手馬の掩護に配備し、敵の襲撃に備えた。（注・1）

13日〇〇二〇頃、態勢を立て直した敵は数縦隊となり、月明の本道沿いに第二小隊の前面に殺到した。第二小隊の十数名は銃撃あるいは手榴弾を投げ合い、白兵をもってこれに突入し、数度にわたる敵の攻撃を撃退した。文字どおりの混戦数時間、長い激戦の夜は明けたが、敵は約三千余の屍体を残して退却した。このなかに第一五九師長、程中将の戦死体も発見された。（注2）

本道交叉点堤防上に陣地を占領した中隊主力陣地には、第二小隊正面を濾過した敵の大縦隊が怒濤の如く乱入し、彼我入り乱れての死闘が続いた。木村中隊長斃れ、つづいて宮脇軍曹も敵弾をうけて中隊長を被うように折り重なって斃れた。太田第一小隊長は手榴弾により爆死し、下士官・兵多数が傷つき斃れ、敵の損害も多大であったが、中隊主力も決定的な打撃をうけた。

（注・1）中隊の編成は本部一〇名（書記獣医下士官、ラッパ手、衛生兵特務兵を含む）と四ケ小隊。一ケ小隊は概ね三十名内外。ただし、手馬の位置に手馬兵を残すので、戦闘員は約二十五名ぐらいとなる。

（注・2）、MG小隊長・福井正勝氏47期の日記によると、「当正面の遺棄死体約三千にして、同士討ちによるもの多し」と誌している。屍体数は正確に調べた数ではない。

——第一中隊の戦闘状況——

第一中隊（中隊長39期山野久雄大尉）は、〇、三〇頃、本部と第二中隊の中間、本道南側の堤防下に進出したが、想像以上の敵大縦隊の中に突入するの恐を避けて、月が没するのを待つこと数分、月は隠れて暗闇となった。この好機を捉え、山野大尉を先頭に中隊一丸となり、白刃をかざして突入、山野中隊長、平松軍曹戦死、奥村曹長負傷し、中隊はひとまず本道付近に集結し、爾後射撃により応戦した。

敵は混乱状態となって同士討ちを繰り返しつつ東進し、闇の中に消え去ったが、その一部は9Kや攻城重砲兵第一中隊の陣地方向に前進した模様であった。

——MG小隊の戦闘状況——

MG小隊（小隊長47期福井正勝）は〇〇、三〇頃、聯隊本部付近に進出して陣地を占領し、眼前を右往左往する敵を撃ちまくり、多大の損害を与えた。MG銃身が夜目に赤く熱したという。

俘虜の言によれば、仙鶴門鎮付近に進出してきた敵は、南京守備の第一五九師を基幹とする約二万で、12日日没とともに玄武門を脱出し、玄武湖南岸を経て堯化門の南を通り、仙鶴門鎮に進出したものであることを確認した。

〔わが軍の死傷者〕

戦死者（第一中隊）少尉池田正夫、曹長平松米一、伍長浅井悦郎、上等兵柴山勇、（第二中隊）少佐木村正世、少尉太田重兵衛、曹長宮脇真治、軍曹丹羽正春、伍長大石清、伍長長屋清一、上等兵鈴木光男、上等兵後藤信芳、上等兵山田思郎、（MG小隊）上等兵大谷正男

戦傷者（第一中隊）大尉山野久雄、少尉加藤秀雄、軍曹奥村良平、上等兵川辺留吉、（第二中隊）伍長山田隆義、上等兵山本武士、上等兵糟谷芳雄、一等兵近藤七郎

戦死馬四、三八頭

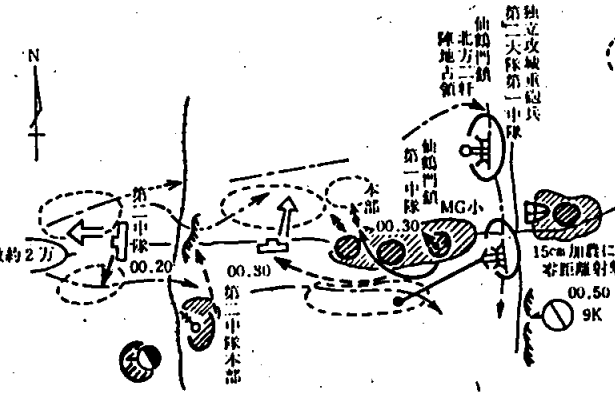
【筆者注】

佐々木到一少将の『私記抄』によると、「佐々木支隊の後衛の歩兵第二中隊が、夜半以後、二方面より反復殺到する敵部隊と交戦撃滅、さらにその後方の集成騎兵隊が暗黒の裡に敵の襲撃をうけて、部落内に突入せられ、人二百、馬六十の損害をうける失態……」と述べているが、3K史によると、戦死十四名、戦傷八名、馬四三十八頭の損害であり、食い違っている。

この3Kの戦闘は、『小戦例集』第四輯第三十六（砲兵）の記録と同一のものであり、沢田正久氏49期の「仙鶴門鎮の夜襲」の前哨戦である。また、澄田敬夫氏証言の（38iの堯化門の捕虜約七千二百」、宮本四郎氏の遺稿「捕虜一万？ の投降」と一連の関連性があるように思える。

この戦闘記録から、投降俘虜数を推定してみよう。

3K史添付要図によると、この大部隊は南京城内に待機していた一六〇師・一五九師・三六師・一五六師・七四師の五コ師が南京城内から紫金山北方地区を経て進出してきたものと判断している。中国の『抗日



仙鶴門付近戦闘要図（昭和12・12～12・13）

戦史』（前出）によると、南京防衛軍の兵力編組には七四師はないので、総兵力は約四ケ師であろう。

当時の一コ師の実兵力は、損耗して半減し約三千内外といわれるので、四コ師で合計約一万二千内外と見積もられる。遺棄死体約三千とすれば、残存兵力は約九千内外となる。逃亡者もあろうから、14日朝発化門で38iが収容した捕虜約七千二百という人数は、首肯できるものではあるまいか。

これは、まったく紙上の推算であるが、38iの澄田氏は約二千内外といわれる。投降捕虜数を確認することは難しい。

追記

▼中山重夫氏の目撃談について　（岩仲戦車隊の段列兵として従軍、東京都江戸川区平井一丁目、都営住宅六号棟）

中山氏は昭和12年7月、戦車第一大隊（のちの岩仲戦車隊）の段列兵として応召し、北支から中支に転戦し、南京攻略戦に参加した。毎日新聞（昭和58・8・4）、朝日新聞夕刊（昭和59・6・23）掲載記事によると、「雨花台で四時間余りも老人・子供を虐殺する光景を目撃し、この悲惨な戦争体験をバネにして、日本軍侵略の記録映画を自費購入して、講演行脚をつづけている」という。

また、『証言・南京大虐殺』（南京市文史資料研究会編、昭和59・8・1発行、青木書店）にも、中山氏の目撃談が「日本軍将士の虐殺の証言」として引用されているので、その梗概を掲載し、前出城島中隊長（岩仲戦車隊第一中隊長）の証言と対照しつつ、筆者の見解を述べる。

【中山氏の証言】

「忘れられないのは南京入城（注1）の二日前、郊外の雨花台で見た光景。白旗を掲げてくる中国人を鎧の上に座らせては、日本兵が次々と銃剣で刺し殺していく。一突きでは死に切れず苦しんでいる人を、軍靴で鎧にけ落としては土をかける。年寄りであろうが、子どもであろうが見さかいなしの殺戮がつづく。四時間余りも凝視していたでしょうか……その日からは、ああ戦争は嫌だと思うようになった。」

そして、静岡市の中学校教諭、森正孝氏製作の8ミリ映画「侵略」――南京大虐殺や三作戦を扱った作品――を自費購入して、反戦平和運動をつづけているという（注2）。

また『証言・南京大虐殺』67、68ページは次のように記述している。

「自分は岩仲部隊が発動した南京総攻撃に随行し、日本侵略軍の南京占領後は、ひき続き同地に駐留した。岩仲戦車部隊が（注3）南京に入城してのち、自分の眼前で展開されたものは、まさに一場の人間地獄であった。大通りから横町まで到るところ中国人の死体であり、そのうちの多くは婦女子と児童であった。

これらの死体が身につけていた衣服は、すべて剝ぎとられ、身体は切り裂かれていた。逃げ遅れた中国人のうち、ある者は銃殺され、ある者は生き埋めにされた。万にのぼる数の無辜の中国人の死体が河に投げ込まれ、その鮮血は長江を赤く染めた（注4）。

「こうした惨状は、今もなおありありと眼に浮かびます……。この不幸な時代に、日本軍国主義が中国人民にもたらした災難は、どのように訴えようとも永遠に語り終わることはありません。」

【筆者注】

（注・1）　入城の二日前といえば12月11日であるが、当時、岩仲戦車隊は馬群から中山門に向かい南京街道を進み、11日には孝陵衛付近の中国軍陣地を歩兵第二十聯隊と協同して力攻していた。したがって、岩仲戦車隊は11日、雨花台にはいない。これは戦史のしめす通りである。

しかも、当時は城外陣地では彼我入り乱れての紛戦がつづけられていた。自己の任務をよそに、四時間余りも他部隊の非行を凝視する余裕があったであろうか。なお、当日、私は雨花台の道路近傍に一般住民の姿を認めなかった。

（注・2）　私たちの軽装甲車隊は雨花台から中華門に突進したが、一枚の写真を撮るべく、道路横の鎧から身を乗り出した従軍記者福岡日々新聞の槍山氏は、頭を射ち抜かれて戦死された。当時の従軍記者は勇敢で、たびたび第一線に進出されたが、8ミリを撮った人はいないと思われる。

（注・3）　岩仲戦車隊は13日、中山門から入城し、城内の故物保存所付近に集結した。そして、第一中隊が14～15日、中山北路、漢中路に沿い城内掃蕩に協力したが、その状況は城島中隊長の証言（前出）のとおりである。

「大通りから横町まで至るところに死体、婦女子・児童の死体が多く、人間地獄」のような状景はない。

（注・4）　中山氏は、どこで生き埋めの光景を見たのであろうか。また、万余の中国人の死体が河に投げ込まれたというが、中山氏は、いつ、どこに行って、この光景を見たのか。少なくとも入城式の行われた17日までは、一段列兵が揚子江岸まで外出することは許可されなかったはずである。

▼「中島橋」「万人坑」について――死骸のうえに建設された橋、一万五千体余りの死体埋葬の穴――

（『証言・南京大虐殺』99・100ページ）

『証言・南京大虐殺』によると、一九八二年8月11日付『南京日報』よりの転載として、六〇歳の老人朱友才の告発を次のように掲載している。その要旨を紹介する。

「12月16日の午後、中島部隊（16D）は、旧国民党陸軍監獄に監禁されていた万にのぼる「俘虜」（うち約半数は一般民衆であった）を江東門まで追い立てた。人の群れは道を埋めつくし、江東河のほとりまで約三、四百メートルの長さがあった。

夕刻、道路両側のわらぶき家にガソリンをかけて火をつけ、その火の光が照らすなかで、軽・重機関銃が一斉に火を噴きし、泣き叫ぶ声は、数里離れて隠れていた朱友才にさえ聞こえた。江東門は死体の山が築かれ、血は流れて河をなした。

翌日、日本軍はその死体を河に投げ込み、その上に橋板を固定してこれを「中島橋」と名づけ（注2）、大量の戦車、軍用車、騎兵がこの「人橋」を通って江東河を渡った。

気候がぬるみ氷が解けたころ、紅卍字会が、この死体の埋葬にあたり、二つの大きな穴に運んで埋葬した。その数は（注3）約一万五千体余り、のち、この地の人はこの穴を『万人坑』と称した……。」（ゴシック筆者）

【筆者注】

（注・1）　12月16日、16Dは陸軍監獄収容の俘虜一万余を江東門に連行できるような態勢にはなかった。俘虜を陸軍監獄に収容したのが16～17日頃である。（榊原主計参謀の証言）。

また、16D入城部隊担任の掃蕩地域は作戦命令によれば中山路・中山北路以北であり、江東門付近には10Aの6D・45iが15日以降駐留した。江東門付近を16Dが16日、行動することはできない。

（注・2）　死体を江東河に埋めて「中島橋」と呼び、大量の戦車……が通ったというが、この方面を戦車は行動していない。「中島橋」の呼称は、いかがなものであろうか。

また、江東門には、橋がかかっていて焼却されておらず、45iはこの橋を通って前進したのである（45i戦史、参戦者の証言・前出）。

（注・3）　一万五千余の死体に二つの穴であるから、一つの穴に約七、八千体を埋めなければならない。パワーショベルのない当時に、どのようにして穴を掘ったのであろうか。

不思議な告発記事であるが、私には45iの上新河、江東門、新河鎮付近の激戦（前出）と関係があるように思われる。この激戦で多数の遺棄死体がクリークを埋めた。こ

の光景を見、あるいは伝え聞いて、「虐殺」に短絡したものとしか考えられない。

南京攻略前後

編集部

「日本軍に関する支那軍側の観察」

（『偕行社記事』昭和十四年四月号より）

以下掲載する三篇は各方面に於て入手した支那側文書の訳文である。其の叙述往々正鵠を失し又其の観察は例により支那側の荒唐無稽多く、往々噴飯に値するもの少からざるも、他山の小石としてしばらく原文の儘採録することにした、此の点読者に呉々も御諒察を乞ふ次第である。

（偕行社編纂部訳）

其の一　南京上海抗戦に得たる所の経験と教訓

前進述

前言

私は八十八師の上海戦には二回とも参加せし一人にして、現在第三期抗戦開始に際し過去の戦闘経過を詳細報告し以て当局の参考に供し度いと思ふ。

武人文筆立たず願はくば参戦諸同志の叱正を希ふ。

一　戦前に於ける対敵準備

去歳（昭和十二年）八一三の役前、八十七、八十八、三十六の各師及上海警備部隊江蘇保安団並に砲兵交通団等の特種部隊は悉く前京滬警備司令の隷下に入り、秋葉を掃ふ勢にて一挙に上海倭寇海軍根拠地を掃蕩し我が空軍は敵の海上艦隊を殲滅せんとするの企図を策定せるものにして、主動的戦略に立つもの誠に適切なるものと言ふべし。

二　戦争手段上より彼我の比較

甲、戦略方面

戦略上より言へば倭寇と蘆溝橋に於て衝突事件発生せし後に於ても、我が京滬警備司令部は遂に迅速に部署すること能はざりしに、適々上海竜華飛行場事件に応じ遂に敵側をして準備する所あらしめ、八一三の対峙局面をなすに至れり。

八十八師に就き述ぶれば、第二百六十四旅の愛国女学校奪還の戦闘に於て若し其の当時勁旅教団を得、我が士兵にして傷を裏み屍を踏み鋭意攻撃を継続し得なば、敵の海軍根拠地を破壊し得たらんに、事実に於ては勝機を逸去し爾後戦略地位は遂に顚倒するに至れり。

これ上級者の策を決するに余ありて、遂に猶予の造成する所にして、思これより始れり誠に痛恨事なり。

乙、戦術方面

多数の兵力を敵の堅固なる工事及水上艦隊の前に陳列し、且敵の制空を受け遂に発展をして困難ならしめ、敵は更に其の陸海空軍の優勢なる砲火を以て我に臨みたるが故に兵力を消耗すること頗る大なるものありしなり、但し我が最高指揮部は能く戦術運用を敏活ならしめ側面攻撃或は奇襲、或は包囲等を以て策応し、要点を保持して得る所多く、倭寇に与ふるに上海戦三月来の最大の打撃を以てせり。

丙、戦闘素質に就き

1. 精神

上海戦に於て我が方の士気は終始旺盛にして官兵は攻むれば即ち勇猛に前進し、守れば則ち陣地と生死を共にし、敵飛行機敵制の下に在りと雖も犠牲を避けずして任務を完成せり。

第八十八師に就きて言へば閘北の進攻、八字橋の占領、五州公墓の攻撃、日本ビール会社奪取、愛国女学校の克復、四行倉庫の死守、雨花台の血戦の如き諸戦闘に於て、我が民族の正気を発揚し国威を張ることを得たり。

2. 技術運用

技術の最も必要なる者は射撃と作業及刺槍（銃剣術）の習熟にして、此の訓練ある歩兵にして始めて克く任に耐へ得るものなり。惟ふに我が軍は僅少なる空軍及砲兵を以て相互の連絡は頗る適切を欠き、我が軍の攻撃をして徒らに犠牲に供するのみにして任務を達成すること能はざりしは、これ我が歩兵の最大の苦痛とする処なり。

例へば我が軍が愛国女学校を攻撃せし時歩兵の某営長能く加農小砲を指揮し、始めて敵の重火器巣を摧毀し以て敵人を撃潰するを得たり。

一歩を進めて言へば当時若し飛行機、砲兵の確実なる協同を得れば則ち我が軍の損害を減少し得べく、又一挙に倭寇の根拠地を突破して我が第八十八師の首功となすことを得べし。

之を要するに敵軍の兵器は既に歩兵火力より進みて飛、砲及機械化の各聯合兵種を以て之に代へあり、技術運用方面に於て敵は我に比して進歩しありと認めざるを得ざるなり。

3. 装備

我が方の装備は比較的に劣勢なりしも適時使用し得たり。唯制空権は敵のために制せられ、我が砲兵をして其の威力を発揮すること能はずして、我が戦局に影響を与へたり。

三　戦争素質上彼我の比較

甲、過去の軍政軍令上の欠陥

我が方は過去の内戦甚だ長く軍令軍政の多くは不統一にして指揮官の程度に差異あり、従つて部隊の訓練も亦之がため優劣あり。甚だしきに至りては内戦の経験に憑りて部隊を指揮する者あり、官兵は射撃と作業技能を欠き連絡も亦適切を欠きし故、機に応じて以て敵を制する能はず、為に戦闘力を減じ且友軍にまで影響を及ぼせしことはこれ上海戦を終束せしむる一原因となれり。

敵軍の指揮官は程度頗る平均し適切に其の部下を掌握し且能く各兵種の協同作動をなし得、加ふるに十分に其の優勢なる火力を発揮し、側襲迂回中央突破及包囲等の戦術を行ひ、以て我が要点を攻略し頗る功を奏したり。之を究むるに軍令軍政の統一にあらざるはなく訓練普及の賜なり。

乙、中下級将校指揮の比較

我が軍の各級幹部の戦闘指揮は頗る能く発揮せられたるも、戦術上の運用は依然として欠陥を感ずるものあり。

敵軍幹部以上の組織は我に比し健全なるが如く、敗る（る）も再び集り来りて行動を継続す、我が方は幹部死傷する時は士卒は掌握する能はざるの弊あり。

丙、交通運輸と戦争との関係

敵軍は海上運輸及機械化を以て弾薬補給は我に比し便利にして、上空の顧慮なきため迅速に少数の兵力を運用し、軽重火器を携帯し配するに十分なる弾薬を以てし、中央突破或は側襲を遂行せり。之に反し我が方は偵察容易ならず、交通阻害せられ補充比較的困難なるを以て兵力多しと雖も、損害為に敵に比し大なり。

丁、軍質効力及敵人の精神

敵軍は多量の飛行機及大砲を以て我が後方部隊の行動を阻止し頗る成功を収めたり、敵は多くタンクの威力によりて襲撃を行ひしと雖も、我が戦車防禦砲の射撃により其の活動を阻止することを得たり、我が軍は常に夜間を利用して行動し或は突撃を行ひ敵をして施すに策なきを感ぜしめ、敵亦屢々暗夜を利用して攻撃するも敢て深く我が陣地に入らざりき。其の官兵戦争怯怖の一端を見る可し。

戊、衛生救護組織

敵軍の救護に対する組織は我に比し完備しあり、常に其の担架兵は側匐前進して死傷者を救護するを見たり。

我が方を顧みるに一般師団長は平時此の点に対し頗る漠視しありて、担架兵の定員は既に不足し訓練は全くなく、為に負傷者の多くは出血過多のため治らず、又死者すら放棄するものあり。

四　上海戦後敵の迅速なる前進の原因

甲、上海戦の失敗

当初我が軍の官兵は皆、前進ありて退くことなしの壮志を抱きありし故、志気は終始旺盛なりき。次で大場の守を失ひしと退却の命令のために士気は遂に頓挫し、其の後の状況は日に非にして上海戦区を放棄せざるを得ずして、多くの軍隊の行動はたゞ混雑の一途の

み。屢々敵飛行機の襲撃に遭ふや損害頗る大にして援護を担任しある部隊さへ、既設の工事を利用し以て敵の追撃を阻止すること能はざりしは、殊に惜むべきことに属す。かくして南京近郊の戦闘を惹起せり。

乙、倭寇の前進

敵軍追撃の迅速なりし原因は、我が方の交通路線の与へし便利にして、其の機械化部隊を以て我が戦線を突進し、之がため我が掩護部隊の内には収容任務を完成すること能はざりし者さへあり、これ我が掩護部隊の交通路線を破壊すること不十分なりしためによるなり。

丙、軍民未だ合作する能はず

江南の人士は古来文弱と称せらる、但し近来倭寇の侵入止まざるに鑑み、怒極りて抵抗を思ふに至りしは理の当然なり。

戦争の未発前該地方の政府は民衆訓練及組織に対しては責任を尽しあり、上海戦発生するに及びて能く軍隊に協力し後方の秩序を維持せり、但し軍隊の撤退せし時指導する人なかりしため各地に四散し、為に敵をして任意に長駆直入することを得しめたり。

五　南京戦役失敗の経過

昭和十二年十一月下旬、我が上海戦参加部隊の一部は命によりて南京に転進して整理補充をなし、且配するに新鋭の教導総隊及憲兵団等の兵力約十数万を以てし、総て某長官の隷下に入れり。某氏等は当時死守するの決心を以て南京近郊一帯に防禦配備をなせり。

最高軍事長官は十分なる軍費を給し、我が軍人民等も亦倭寇の進攻を粉砕するを嘱望せざるはなし、倭寇数万の兵力を以て進攻し来りて数日を経過せしのみなるに、遂に全城の秩序混乱し、士をして闘志を無からしめ、首都は之がため陥落せり。兵力を犠牲にする此の戦役を以て最大と為すものにして其の失敗の原因を略述するに次の如し。

甲、蕪湖陥落の影響

右側翼の友軍は兵力数万にして長興等の地城に防備しありと聞きたり。

敵兵は数に於て限ありしに、甫めて接触するや相率ひて潰退し遂に広徳、宣城等の地相継ぎて陥落するに至り、南京の側背之がために脅威を受け其の影響最も重大なりき。

乙、士気の不振

各軍の上海戦場より新に南京に移りし時、原有官兵の生存するもの幾何もなく、其の上悉く非常なる疲憊を感じありたり。

在京中に得たる補充新兵は訓練未だ十分ならず、戦闘の経験なく遂に官兵の士気を衰頽するに至らしめ、失敗の主因をなせり。

丙、背水陣の誤算

南京近郊一帯の陣地は頗る堅固なりと称せらる。但し沿江の両側翼、蕪湖既に敵に占領せられ鎮江の封鎖線も亦敵海軍に突破せらるゝの虞あり、敵飛行機は上より俯瞰し砲火は前方を阻止す、進むも既に許されず守るも又能はず、後に大江の険ありて軍心惶惑し殆ど戦はずして潰ゆるの勢を示しありたり、これ背水陣の不当なり。

丁、指揮官の過誤

指揮官の徳望は能く各級将領をして相信ぜしむること能はず、且其の頭脳陳腐なるため終始受動の地位に立ちて敵の逐次の攻撃を甘受せり、若し当時、新鋭の兵力を以て蕪湖に向はしめ一部を以て退きて浦口を守らば、大なる時は戦局を挽回し小なる時にても蕪湖の敵を側襲し、其の江北に渡江するを阻止するを得たるなるべし。

六　今後の抗戦に注意すべき件

甲、慎重に指揮官を任用すべし

以上を綜合するに、上海戦の初より南京戦の終まで、悉く失ひしは指揮長官その人を得ずして不利の戦況を為したるが故なり。指揮長官の任命に対しては慎重に選択を加へざる可からず、これ注意すべき一なり。

乙、相当の武器を配備すべし

現代の戦争に於ては質は量よりも重要にして、倭寇は砲火の威力によりて我が土地を侵略占領せり、我が軍亦砲火の効力を以てすべきものにして、余は砲兵につき当局に要望するは速かに補充増加すべきことなり。正式会戦に重砲を集中使用して其の威力を発揮せしむるは勿論、運動戦の部隊に対しても軽便小砲或は迫撃砲を配与して、敵軍の堅固なる火巣を破摧し得て各個殲滅に利あるものなり、これ注意すべき第二なり。

丙、速かに後備軍を訓練すべし

後方に待機しある各部隊は以上記述せる事項に就き検討を加へられ度し、速かに訓練を要すべき事項次の如し。

1. 幹部人才の養成

参戦後の初級幹部以上（治癒せる戦傷官兵を利用するは最も良し）を以て実兵指揮の諸法則を指導し以て部隊の基礎を作れば則ち兵は精となり、勝利は期して得べし。

2. 戦時短期の教育

イ、学科

愛国の精神を激励養成し、且現代科学戦に対する一般軍事知識。

ロ、術科

各種兵器の射撃及故障の修理竝に戦闘法則に熟練し、土工作業を実施し身体を鍛錬す等々。

烏合の衆にして之を用ふるも、徒らに自ら陣営を擾乱するのみ無きに如かざるなり。これ注意すべき第三なり。

丁、簡単なる民衆組織訓練工作を施行すべし

戦区の民衆に対しては戎事を妨害せざる原則の下に掌握を適切にし、能く軍隊と進退を同うせしむべし。民衆に対する組織訓練工作は簡単に之を行ひ、力めて理論を避けて次の如くすべし。

1. 民心の綏撫

民衆の生産工作時間を妨害することなく、難民に対しては慰撫救済を加へ、抗戦により家産を損失せる民衆に対しては弁償すべし。

2. 精神訓練

農閑期を利用して数ヶ処を規定して集合地点となし、亡国の苦痛を告げ滅亡より救ひ生存を図るには匹夫にも責ありとの意義を知らしむべし。

居住地附近に地勢を選択して拠点工事を構成すれば、軍隊抗戦に有利なるのみならず、民衆自衛の用途となすことを得べし。

3. 民衆を武装せよ

成年壮丁に武器弾薬を支給し責任者の管理下におき、倭寇の来攻に遇へば先づ老幼婦女を安全地帯に移らしめ、壮丁は三々五々組をなし歩々に抵抗し、正規軍と連絡をなして敵の気力の衰疲を待てば、則ち正規軍之を殲滅し得べし。

以上述べし弁法によれば則ち漢奸の発展を阻止するのみならず、同時に敵の進攻を困難ならしむ。然らざれば民心散慢となりて家産を保護する観念に捉はれ、全民族抗戦は虚言となられん。民衆工作員は毛を吹いて疵を求め、却つて民衆の苦悩を増加し反感を激成し易し、これ注意すべき第四なり。

其の二　敵外線作戦の成功と失敗の検討

朱啓宇述

〈前半略、結論のみ掲載する〉

戦場は愈々拡大し戦線は愈々延長し敵の背後はよりて以て愈々空虚となれり。之に反して我が遊撃隊は漸次活気を呈し襲撃の好機あれば随処敵を牽制す。此の正規軍と遊撃隊との連合作戦にて四面楚歌を形成しある状況下に於て敵は果して真に暴虎馮河の勇ありや。遠距離の迂回包囲の外線作戦を慣用する時は必ずや我に各個撃破せらるゝ虞あらん。其の目下使用する所の兵力は既に対支作戦兵力の予定数量を超過しあるもの故、全軍覆没し奈翁モスコー侵入の轍を踏むに非ざれば幸なり。

倭寇我が一県一城を得んと欲すれば其の力即ち余りあるも、我が軍の主力を破截し我が領土を征服せんと図るは根本的に不可能にして、其の独り東亜を独占し世界に雄飛せんとする野心は更に論ずるに足らざるを信ずるものなり。抗戦は長期に属す目前の一時の進退一地の得失は毫も我が長期抗戦の大局に影響することなし。

流血の貴き経験と教訓とを以て我等最後の勝利に換へんことを。

其の三　敵我優秀の比較

筆者不詳

敵軍の劣点

（一）敵軍士兵は迫られて戦ひ、遠く郷土を離れ、均しく深く侵略戦にして不必要の戦争なるを知る。故に犠牲精神欠乏し死を畏るゝの心特に重し。

（二）機砲の協同なければ歩兵は全く其の戦闘力を失ふ。故に最も我の夜襲を畏れ、尤も近戦肉薄を懼る。

（三）行軍力薄弱にして毎日の行程概ね五十里（二十五公里）に過ぎず。

（四）敵行軍駐軍間の警戒及捜索は多くは厳密ならず、行軍時空軍の偵察を除外せば僅かに騎兵の公路に由る捜索を恃みて前進し、公路以外は多くは敵兵なし。

（五）鉄道公路外を除きては其の部隊の前進多くは遅滞す。山地に在りて尤も然りとす。

（六）作戦地後方多くは空虚なり。即ち重要市鎮は常に極少の兵力を駐む。

我が軍の優点

（一）官兵皆国家民族生存のためなるを知りて戦ふ。尤も深く日寇は我のため唯一の敵人なるを知悉し、日寇に戦ひ勝つは即ち中国復興の開始と為す。故に均しく壮烈の犠牲精神あり、之に因りて攻撃精神旺盛なり。

（二）歩兵は其の他の兵種の協力なしと雖も能亦く単独持久抗戦す。歩兵は軍中主兵たるの令誉を発揚す。

（三）行軍力特に強く通常一日夜百余里を行くべし。

（四）軍民団結一致、地の南北を分たず、人の老幼を分たず、一致抗戦す。

（五）地形の困難なるを論ぜず、険を履むこと夷の如し。

（六）作戦地後方は守備を須もふるなし。

敵軍の優点

（一）装備完全。

（二）能く戦術戦闘の原則を運用す。

（三）下級幹部の動作熟練。

（四）陣地攻撃時捜索偵察確実敏捷なり。

（五）歩砲空協同確実。

（六）歩兵の射撃沈著爛熟、乱射せず空射せず、狙撃兵を以て目標の選択発現に対し、甚だ敏活適当と為す。

（七）戦場清掃、尤も傷者の救護を以てし陣亡者の後送甚だ迅速と為す。

（八）攻防を論ずるなく均しく構築工事を重視し工作力亦強し。

（九）戦場の兵力転用迅速。

（十）潰退時逃れて戦場外に到れば即ち能く迅速に集合し、建制混乱すと雖も官長均しく能く指揮作戦に任ふ。

我が軍の劣点

（一）装備完全を欠く。

（二）戦術戦闘の原則に熟習せず、更に活用する能はず、各級指揮官多くは只勇敢犠牲を知りて運用を知らず。

（三）下級幹部は独立作戦の能力稍〻差ふ。

（五）歩砲空協同不良。

（六）射撃多くは沈著熟練を欠き、射撃軍紀良好ならず。

（七）衛生交通設備甚だ差ふ。傷病の救護後送確実を欠く。

（八）構築工事を忽視し、尤も攻撃時を以て甚だしと為す。

（九）部隊間の連繋協同不良、接続部最大の弱点と為す。

（十）部隊間の境域甚だ深し。甲連長（中隊）乙連の士兵を指揮する能はず。

創業五十有余年
昔は軍服店　今は紳士服店
昔は軍服を後世の思い出に
ご希望の方「国防色」に特製いたします
ご報参上
㈲伊藤屋商店
〒102 東京都千代田区麹町四―二
☎ 〇三(二六一)四八一七

聯隊史等の編集お手伝いいたします

その他 偕行特別価格 で自費出版の御奉仕致します。

巷間、書店の棚を埋める出版物は汗牛充棟もただならぬものがあります。しかし真に読みたい本は限られております。偕行会員の貴方様の貴重なご体験こそ、その限られたうちに入るのではないかと存じます。ご自分の作品をご自分の手で一冊の本にすることができたら、とお考えになられたことはありませんか。ご自身のために、ご家族のために、或は後に続くもののために、戦中戦後の回想や、お仕事の記録、随筆、和歌、俳句等を、すばらしい遺産として残されてはいかがでしょうか。弊社では企画、編集、印刷、製本、発送、それにお支払い方法等、ご納得のゆくまでご相談に応じさせていただきます。

◉本の種類　自叙伝・戦記・遺稿集・論文集・講演集・小説・日記・随筆・歌集・句集・詩集・紀行・写真集・画集・社史・校史・社寺史・古書の復刻版・その他。
◉用紙・印刷方式・製本・装幀・カバー・函等、ご相談の上、決めさせて戴きます。
◉口述筆記、テープ筆記の用意もあります。
◉その他家系図の調製もしております。
◉御見積り凡例　随筆集（400字原稿約120枚）
部数：300部　規格：B6本文80頁
用紙：上質紙　印刷：活版、オフセット
製本：並製本
金額：約30～40万円

下記宛ご一報下さるか、お電話いただければ 詳細資料 お送りいたします。
資料請求券ご利用下さい。（郵送料不要）

印刷・製本
中島印刷株式会社　常務取締役 岩沢 漸二(57期)　営業推進部長 有冨 孝二郎(58期)　電話 03(493)0551(代)　〒141 東京都品川区西五反田4-31-17

企画・編集
株式会社エム・シー・アイ　取締役社長 根岸正直(58期)　電話 03(564)6854(代)
〒104 東京都中央区銀座1-15-7（マック銀座ビル2F）

きりとり線　資料請求券　59.12.31迄